

【獣医さんのアルバムから(94)】

帯広畜産大学動物医療センター

宮原和郎

(帯広畜産大学動物医療センター)

毎日の診療で顔を合わせる富張先生より、「若い先生方よりも少し年配の先生に書いていただいた方が、思い出深い写真を紹介していただけるのではないですか」と言うことで、バトンタッチされた帯広畜産大学の宮原です。「いいよ」とふたつ返事で承諾したものの、さて北獣会員の先生方にどんな写真を紹介させていたどうかと色々引き出しに詰め込まれた写真の山を掻き分けてみたものの、結果としては私が現在も所属する大学の昔の光景をご紹介しますことといたしました。

「帯広畜産大学畜産学部附属家畜病院」は本館改修工事と本館に併設した伴侶動物外来診療エリアの増築を終え、平成21年4月から名称も新たに「帯広畜産大学動物医療センター」として新たな一歩を踏み出しています。建物としては従来の家畜病院本館が伴侶動物研究棟、従来の家畜病院病理・解剖棟が病理解剖検査棟として全面改修され、さらに従来の新家畜病院が産業動物研究棟として一部改修されました。病理解剖検査棟では、産業動物の難病畜を一時的に飼養して診断検査するための施設とその後の病理解剖を一連の流れとして行う施設として改修され、産業動物の外来診療と入院を行っていた新家畜病院は産業動物研究棟として飼育施設を充実させ、専用の講義室を備えた施設に改修されました。とくに伴侶動物研究棟には、従来の正面玄関前に2本の渡り廊下で伴侶動物の外来診療エリアが増築され、大きく変貌しています。これらの施設については本稿で紹介するよりも本学ホームページ (<http://www.obihiro.ac.jp>) の右上「地域の皆様へ」から「動物医療センター診療案内」に入り、最下段にある動画をご覧いただくのが良いかと思います。改修後、たった1年しか経ちませんが、以前の家畜病院を知らず、センターになってから所属した職員や学生がすでに半分以上を占めるにいたり、現状が当たり前の彼らと日常診療を行う中で写真を掘り返していると随分恵まれた環境になったものだと、一人時の流れの速さに驚いています。従来の家畜病院は、建設当初は他大学の施設に比べれば比較的広い施設でしたが、機器類が増加し、機能分類が進み、小動物診療が増加する中で、大型犬の入院施設と小動物実習室が混在していたり、小動物実習

室への実習犬の移動には産業動物の実習室を通らなければならなかったために院内感染の問題への対応が非常に難しい状況にありました。さらには家畜病院の講義室へは、一般外来の待合室と診療室の間にある階段を使用しなければならなかったために、実質的に午前の外来診療時間中には講義室の使用を自粛しなければならないなど、ゾーン分けができていなかったことが最大の難点でした。新しいセンターではこの点を最大の改善点として設計されたことから、従来の施設に比較すると格段に使いやすい施設となっています。

さて、写真1は1970年(昭和45年)に建設された当初の家畜病院です。広い耕地と牧草地の真ん中にポツンと建った施設で、まさに伝染性疾患も入院する施設をイメージさせるように本館からは遠く離れた施設でした。実際に近くには伝賃厩舎があり、伝賃馬が飼養されていました。この写真は私の入学以前ですが、学生の時にもこの写真の雰囲気に近かったような気がします。現在はこの写真の玄関前には伴侶動物外来診療エリアが連結され、手前道路の右側には産業動物研究棟(旧家畜病院新館)が、そのさらに手前には総合研究棟4号館(旧大動物特殊疾病研究センター)があり、左奥に見える乗用車の横には産業動物総合画像診断車の車庫があります。さらにこの写真を撮影している位置には、原虫病研究センターが建っていて、この写真の建物の形状としての面影は残っていますが、当然のことながらこの位置からの撮影は困難になっています。本学のみならず、ここ数年の間に全国の獣医系大学の動物診療施設が改修・増築、あるいは新築されていますが、本学の家畜病院も本当に大きく様変わりしたことを物語る1枚です。

1970年に家畜病院が建設された当初からこの建物には故廣瀬恒夫名誉教授が開発した大動物用のX線透視装置(写真2)が導入されており、車載型としては初代の大動物用X線診断車を経て、現在の産業動物総合画像診断車にその技術が引き継がれています。この写真が撮



写真1 1970年建設当時の帯広畜産大学畜産学部附属家畜病院

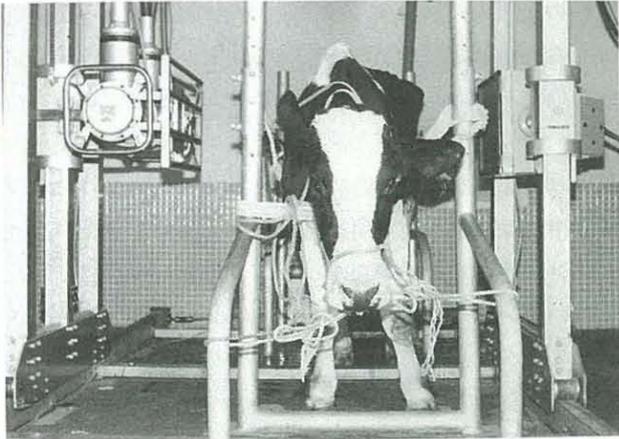


写真2 据置型の大動物用 X線透視装置

影されたときには私はまだいませんでしたが、すでに退職された山田明夫名誉教授や佐藤基佳名誉教授と共に学会や講習会等で何度となく使用した思い出の写真です。この写真をご覧になったことがある先生もおられるかと思いますが、実はこの写真は写真撮影のためだけにセッティングされた写真です。写真には保定された牛の左側にテレビカメラであるイメージインテンシファイアーがあり、牛の右側に X線管球が写っていますが、牛の X線透視検査を行う場合には、牛の腹腔内の大部分を占める第一胃をバックグラウンドとして右側に圧排された第二胃等の消化管を観察するために、X線管球が牛の左側になるようにして検査が行われます。すなわちこの写真では通常と牛の位置が逆向きになるのですが、写真の構図として牛を反対向きに保定して撮影が行われているのです。この当時は透視画像の記録もオープンデッキの…といっても若い方には理解できないと思いますが、大昔の開発当初のコンピューターのように直径30cm程度の円板にテープが巻かれたビデオテープに記録していました。今回のセンター改修でもたくさんのビデオテープを移動しながら懐かしく思った次第です。産業動物総合画像診断車もすでに導入後16年が経過し、先日、更新について検討してみましたが、薬事法の改正等、様々な状況から更新は不可能であることを知り、改めて時の流れを痛感しました。壊れるまで、より多くの学生や産業動物獣医師に透視画像を見ていただき、日常診療の一助（個体診療もそうですが、聴診所見等の解剖・生理・病態を理解するための基礎的なイメージとして）にさせていただきたいと思う次第です。

写真を引っ張り出して、私の先輩であり、10年前の有珠山噴火ではご苦勞されていた室蘭の内山先生の写真が出てきましたので、内山先生にバトンをお渡しして稿を終わりたいと思います。